

鮎立港まちづくり百年会の今

Shibitachi-ko Machizukuri Hyakunenkai Now

佐藤敏宏
Toshihiro Sato

元エア建築家、TAF 設計主宰 / 1951年福島県生まれ。「建築あそび」「ことば閲覧」などの活動を行いHPで公開

3.11の震災に伴った原発事故により被災生活を余儀なくされた私は、震災直後いくつかの地域において主に被災した未指定の歴史的建造物の保全活動を行ってきた。これらの活動は「俺の家はお前の家 お前の家は俺の家」というテーマのもと1984年ごろから始めた活動「建築あそび」¹で得た多くの友人と近世史研究者佐藤大介²との日常対話から立ち上がった活動である。ここでは、そのうちのひとつの現場、気仙沼市唐桑町鮎立(しびたち)地区の「鮎立港まちづくり百年会」(以下、百年会)の活動状況を伝えたい。

震災後、全国の友達から激励とともに届く義援金と、自身に支給される月々6万円ほどの年金を元手に各地へと赴いた。震災後1カ月を経た4月、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク³の委任により、気仙沼市唐桑町鮎立において、歴史的な建造物と文献の保全活動を行っていた。その活動過程で、地元の人から「参加と自治による、まちづくりをしたい」との話が持ち上がった。建築物や構造物をこしらえるといった具体的な目的を持たないいわば「私的まちづくり支援活動」を始め、その基本的姿勢を「何もしない」こととした。企業や大学、非営利団体、学会など既存の組織および専門領域に所属しない浮遊的存在として、自らを位置付けることでしかできない被災者に寄り添ったまちづくり活動が21世紀の本能的活動であると考えたためである。唯一行うことは、鮎立に起こる事実を記録し、情報を公開し後世に伝えるという単純なことである。具体的な目的も結果も求めない。ただ被災地に立ち、被災者に寄り添い問題を発明する態度を維持する必要があると考えた。

しかし、実際には、まちづくりに住民が期待するものは、われわれが行う記録だけではないというのも事実である。折に触れ大学などの友人の助けも必要である。復興として行政が行おうとしている計画も時間とともに進む。それらにどのように対処するか、まちづくりに住民が期待する部分でもある。

ただ、自分が現地で行ったことを振り返れば、ペテン師のごとく振る舞いを過ごすことであつたかもしれない。被災

した住民の家に泊まりだだ酒と飯を食らい、連日同様にまちを歩き回る。集会場を使い続け光熱費は支払わず、仮設住宅に泊まり込み冷蔵庫を空っぽにしゴミを放置し去る。住民を集め檄を飛ばし時にはたきつける。5人の区長の車に乗り込み役所を連れ回し、行政との親密な交渉の仕方を実演する。敵対する住民同士を聴衆の面前で喧嘩をさせ、面前で仲直りをさせる。賛否両者の実名を刻む碑を建て「千年残す」と宣言する。頑固な者の家に上がりこみ、語り仲間にかえる。地域の人がサメの骨からつくった万難に効くとされるお守りが、万難を払い、百年会のまちづくりの路は拓かれてきたと思っている。

震災から1年と3カ月が経った6月13日と18日、気仙沼市が主催する懇談会が持たれた。地域の要望を一覧できる要望図を提示。おおむねの理解を得られた言葉を関係者からいただいた。ここで百年会の復興計画支援に関する活動はひとつの峠に立つことができた。しかし、防潮堤に関する諸問題は残る。また、要望を具体的な内容に落とし関係地権者の同意を得る作業は終え、高台移転希望者がまとめる作業はこれからである。

まちづくりにかかわる者の課題も顕在化していることは、自戒を込め記しておきたい。まちづくり活動にかかわる者も所属ローカルへの利益誘導を無意識に行い、自分がかかわる領域(地域)のためのまちづくりにほかならないことになっていないであろうか。また、これまでの社会においては、細分化された専門領域に属し、そこから生まれる対話によって多くの事象が決定され、開かれた議論とならず、過程は隠蔽されがちではないのか。細分化された社会のなかで専門化された対話の多くは、一般に伝わりうるものではなく、その社会的地位を保全するためのポジショントークともとらえられよう。そのような現実はある領域においてあり、原発事故を契機に露出した原子力村用語もその限りではない。他領域と高度に交通可能な対話術を学ぶ機会をつくり鍛え上げる必要がない社会システム全体が、精緻に組み上げられ高度に運用されている事実を否定することももはや難しくなっている。どの領域において



図1 | 建築あそび「俺の家はお前の家 お前の家は俺の家」。竣工直後の千万家をみんなで使い込んだときの集合写真(2000年5月27日)
[すべて筆者撮影]



図2・3 | NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークの建築班としての未指定文化財保存活動の例。左が2011年4月4日、右が2011年4月12日。左右を比較して見ると、がれきの撤去の様子がわかる。石巻市本間家土蔵



図4 | 佐藤大介編著『18～19世紀仙台藩の災害と社会——別所万右衛門記録』



図5 | 『宿藤鮭報』(おらほう) タブロイド版。地域紙のモデル紙(2012年7月発行)



図6 | 鮭立4区。宿藤浜要望図を開き、提出前夜会議。4区区長を中心にごるりと地域の人々が集まる(2012年6月12日)



図7 | 2012年6月18日の懇親会。東京大学太田浩史研究室・東京理科大学伊藤香織研究室・芝浦工業大学桑田仁研究室・宮城大学竹内泰研究室が加わり、ワークショップを経て翌日、宮城県・気仙沼市・設計会社との懇親会。地域の要望を吸い上げていただきました

も横断交通可能な対話と活動が必要とされる。こと、被災地ではそのことが顕在化する。被災地の人は専門用語を十分に理解できるわけではない。ただ微笑み返したり、対話の場に参加しない選択があるだけである。被災者を支援する資格者は継続力を身に付け彼らの深層を聞く術を持っている者。被災地再建のための有効な術を持った者。それらを組み合わせ達成すべき順序を整え対応可能な各政策システムの海を横断的に泳ぎ渡り実現させる者。被災地の未来の人々が求める深遠な要望を被災民に教え込み現政策に組み込ませ実現させる力業を持った者。私自身は、まちづくりとは地域の倫理(暮らし方のベクトル)を地域の人々が日々無理なく生活に沿いつくり続ける行為と解している。

鮭立におこる事実を可視化共有するため、現在、各行政区(宿舞根地区、藤浜地区、鮭立地区)の頭文字をとり「宿藤鮭報」(おらほう)と名付けた地域新聞2号を編集集中である。地域のさまざまな集まり、漁協、女子会・育児会・老人会・若者会・介護会などに呼びかけ、これらの会と多様に交流し地域の問題を発明し続けることで、百年会は次の活動位相へと移動していく。

今後も関係する公務員の方々や技術者、そして、支援いただく人々と連携し、地域の人々の内外に対立が生まれないよう、多領域の露払いと地ならしを行いたい。多様な

人々に迷惑をかけ多くの恨みを買って陰口をたたかれ信頼関係も壊れることもあるが、被災地の要望の多くが百年の計のもと実現し、地図に書き入れられる日は来るだろう。私はこの美しい風景、豊かな海産物をはぐくむ海と山が混在する三陸の生態に紛れ込み生き続けていたいと考えている。

この間、多数の激励と支援を受けた。一人ひとりの名を記すことはできないがこの場を借りて感謝申し上げます。

注

1. <http://www.fullchin.jp/> 第一回「建築あそび」1984年秋、講師は日本建築学会賞受賞前の毛綱モン太氏。
2. 東北大学防災科学国際研究所准教授。元NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク事務局長。著書に『18～19世紀仙台藩における災害と社会——別所万右衛門記録』(東北大学東北アジア研究センター叢書、第38号)。佐藤敏宏の長男。災害によって流失する古文書の救出活動と研究。近世末期の仙台藩で起きた飢饉・津波・地震・水害などの災害に遭い仙台藩主を含める武士・地域の有力者・人々・財をなす商人などが連携し、災害を乗り越え地域を経営する様や心労で早世した藩主の言葉などに光を当てて。
3. 2003年に発生した宮城県北部地震によって被災した文化財の救済活動を契機として設立された団体。地域に埋もれた歴史資料の救出、散逸や消滅を防ぐために活動を行う。2007年、NPO法人化。
<http://www.miyagi-shiryounet.org/00/front.htm>